

ヤモリのように少年は壁に張りついた

運良く、岳陽站前ロータリーに面した岳州飯店（二五元）にもぐり込むことができたので、そのままベッドに横たわって、眠った。

湖南省、岳陽（イェヤン）。

エアコンというよりもクーラーという言葉が似合いそうな冷房機音が微かに眠りの周辺をうろついていた。

昨夜は珍しくあまり眠れなかったので、そのまま一時間ほど眠っただろうか。

目覚めると裸電球のつるされた岳州飯店のシングルの部屋。少しくたびれたソファート、テーブルの上には室内アンテナを角のように生やしたテレビ。『目覚め』は取り残されたように、ぽつんとベッドに腰を下ろしていた。さつきと同じようにクーラーはやかましい音をたてている。

何も変わってはいない。ただ僕ひとり、世界から取り残されたのだ。世界は現実に一時間分の時を運び、その分だけ僕ははぐれる。

そのような感じをあなたは持ったことがないだろうか。あなたが世界からはぐれていき、はぐれてズレた世界こそが現実であり、他ならない現実にはぐれていくという感覚。去っていくとする世界と立ちすくむあなたとの間を、音もなく流れる冷たい風。言いようのない凍えの感覚。それにもかかわらず、現実はあるのではなく世界に加担するのだということが明確に意識される、その喪失感。

旅において目撃するのはもしかしたら世界と僕との疎隔なのかもしれない。日常、僕たちは生まれ育った世界において、その疎隔に様々な架橋を張り巡らし、疎隔自体をあらかじめ感じることはない。世界と僕という疎隔は調停され、あたかも世界と僕とは認めあい、ある部分では融合しているようにも感じている。しかし、旅はこの平和な調停に疑問符を突き付ける。世界は決して均一ではない。

「さて！」

と僕は僕に気合をいれる。

それはもしかしたら世界と僕との越えられない疎隔を知りつつ、あえて一步を踏み出す、そのふんぎりを自らに言い聞かせているのかもしれない。

※

岳州飯店の螺旋階段を降りて、ロビーへ出ると、上映中の映画の音が聞こえてきた。フロント脇のホールが小さな映画館になっているのだった。入口の扉は開いていて、カーテンのすきまから暗がりの中に座った人々の背中と、前方には小さな映像が見えた。ちよつと興味を引かれたのだけれども、駅へ行ってチケットを買うつもりだったので、ロビーを出て、駅前のロータリーへと向かった。

岳陽駅の駅舎は三角屋根の平屋でこじんまりとしていた。駅舎の正面は候車室入口であり、售票処は裏手に少し入ったところにあつた。

售票処に足を踏み入れると、いくつかの窓口の前には二、三〇人の行列ができていた。列の中ほどからうしろは比較のおとなしく行列をつくっているのだが、窓口に近いと例によって行列は団子状態になっている。少しおっくうになりつつも、時刻表を眺めながら、「さあ、並ぼうか」と考えていると、一五、六才くらいの少年が声をかけてきた。

話を聞いていると、どうやらチケットを手数料二元で買ってやるというこつらしい。窓口での戦闘を考えるとうんざりしたし、ちよつとくらは樂をしようと思つて、OKした。

少年に一〇元札を手渡して待つてしていると、彼は行列の脇を通つてどんな窓口に近いと行く。僕は、彼が代わりに行列に並んでくれるものだと思つていたので、ちよつと驚きながら見ていると、なんと彼は団子状態になっている窓口の壁にヤモリのように張りついて、人々の頭上から窓口の手を突つ込もうとするのだった。窓口には一本しか手は入らないので、それでも二、三分は苦戦していたのだけれども、ついにチケットを手に入れて、意気揚々と戻つてきた。

「ほらよ！」というように長沙行きチケットを手渡す。

「長沙までは六元。手数料二元で、二元のおつりだ」

と言うと、笑いながら何かを言つて返そうとはしない。

僕の方も見事な技を見せてもらったという気分だ、深追いはしなかつた。

ポケットにチケットをしまいながら見ていると、少年たちは何人かでグループになつていて、次々に行列の人々に声をかけていくのだった。いろいろなお仕事になるのだ。

何はともあれ列車のチケットを手に入れて、少し解放されたような気分だ。岳陽楼へと向かう。

岳陽駅前ロータリーからしばらく歩くと、洞庭湖沿いの洞庭路に突き当たる。昨夜は雨が降つたのかもしれない。道路はでこぼこして、黄色い泥が所々に溜つていた。街並も大都会に比べると古びていて、あちらこ

らにくたびれてガタのきた様子を見せていた。ときおり年代物の路線バスが体をゆすらせるようにして通り過ぎていく。

岳陽一の繁華街、解放路と洞庭路の交差するあたりでは様々な商店が軒を並べて賑わっていた。行き交う自動車やバスもやかましい騒音をたてていた。

繁華街の賑わいを通り抜けると、しばらくして岳陽楼へと至る。

岳陽楼公園は入場三元。二、三組の団体観光客がいるだけで、ひっそりとした印象だ。

岳陽楼は高さ一五メートル。三層の両端をはね上げたような黄金色の屋根が特徴的な建築は堂々として美しい。かつて唐の宰相だった張説が、この地に左遷されたのを嘆いて建造されたといい、江南の三大名楼のひとつとしてその名を馳せている。

公園の入口で入場料を払ったので岳陽楼にも当然登れるのだろうと思つて、楼の入口を入つていこうとすると、服務員に制止された。

登楼のためにはさらに三元のチケットを買わなければならないのだ。

どこへ行つても金を取られることに腹立たしさを感じながらも、せつかくだから登つてみることにした。

楼内には宋代の詩人、範仲淹の「岳陽楼」が大きく掲げられている。その意味はよく分からないながらも、羅列する漢字はなにか圧倒するような迫力があつた。

岳陽楼の上層から眺めると、洞庭湖の雄大な景色が薄曇りの空の下に広がっていた。視界のはるか彼方に洞庭湖の水平線は消えていた。洞庭湖は琵琶湖の六倍もある中国第二の淡水湖というだけあって、湖というよりもほとんど海の風情で、湖畔には船が碇を下ろして、おだやかな海岸というイメージだった。

岳陽楼を出ると、ちょうど入場しようとしていた中国人の家族が、僕と同じように制止されていた。いかにも貧しい労働者といった印象の父親は服務員と言ひ合ひ、身分証らしきものを見せたりして入ろうとするのだが、服務員は頑として認めない。しばらく言い合つたあと、父親と娘だけが入場し、母親は外で待つていることにしたようだった。落胆したような、あきらめてしまったような母親の歳月に痛んだ髪を、洞庭湖からの風が乱していた。わずか三元のことなのだけれども、その三元をわずかだと言ひうる層と、そうではない層の人々がこの国にはいるのだ。

岳陽楼を洞庭湖の方へ下りて、杜甫亭へ。杜甫亭には有名な「登岳陽楼」の石碑がある。付近には洞庭湖公園の建築現場で働く労働者たちが腰を下ろして休憩していた。

昔聞洞庭水 昔聞く洞庭の水
今登岳陽樓 今登る岳陽樓

吳楚東南拆 吳楚（ごそ）東南に拆（ひら）け

乾坤日夜浮 乾坤（けんこん）日夜浮かぶ

親朋無一字 親朋（しんぼう）一字無く

老病有孤舟 老病孤舟有り

戎馬関山北 戎馬（じゅうば）関山の北

憑軒涕泗流 軒に憑（よ）れば涕泗（ていし）流る

岳陽楼からの帰り道、洞庭路を少し入ったところに目に入ってきた慈氏塔へ、一メートル幅ほどの路地を入っていく。土塀の家々の裏口のような路地を入っていくと、古びた慈氏塔はポツンと立っていた。この塔は唐の開元年間（七一三―七四一年）に建てられたもので湖南省で最も古い建築のひとつなのだけれども、その前に石碑がひとつ建てられているだけで、他には何もない。中国人たちの暮らしの裏口に囲われて、ひっそりと立ちつづけているようだった。

ちなみに慈氏塔はその昔洞庭湖に棲んでいたもののけを退治するため建てられたものだ。慈氏という未亡人が、もののけの餌食になってしまった家族のためにその建立に力をつくしたことによって命名された。

洞庭路から洞庭湖へと下りていく道を歩く。洞庭湖の湖岸に立ちたかったのだけれども、その道の両側は漁村の様相で、やがて漁業協同組合のような施設の敷地に突き当たって、行きどまり。

道の両側には洞庭湖で捕れた魚介類を売る露店や小商店が軒を並べていた。

再び洞庭路へと戻って、暑かったし少し歩き疲れたので、飲物と煙草の露店で冷たいジュースと湖南という煙草を買って（二・二元）ひと休み。

それから岳州飯店付近の露店が並んだ市場で一個二・六元のパイナップル買い込んで飯店へと戻った。

お茶を飲みたかったけれども、開水（お湯）がなかったので、三階の受付へ下りて、女性の服務員に声をかけた。服務員は背中を見せて何か仕事をしていたのだが、僕の声を聞くと、

「勝手に持っていけ！」

とどなりつけた。何が気に入らないのかひどい剣幕だったので、そそくさと、部屋の中に並べてあった魔法瓶のひとつを取り上げて、逃げ返った

のだった。

部屋でお茶を飲みながら、ポケットの列車チケットを取り出して眺めた。售票処の混雑と、少年の曲芸さながらのチケット購入術を思い出しながら、ふと見ると、一二日、つまり今日のチケットなのだ。僕はてっきり明日のチケットだとばかり思い込んでいたのだけれども、少年にはそのことが伝わっていなかったのだ。スコンと地獄へ突き落されたかのようなショックだった。

少年が買ってくれたチケットは一二日の午後三時四五分発、長沙行き。售票処で僕は行き先だけしか告げなかったので、いちばん早いチケットを買ってくれたのだろう。チケットを手にしたときに、発車時刻だけを確認して、明日の夕方だからちよつと遅いけれどもまあいいか、と思ったのだけれども。まさか今日のチケットだったとは。

悔やんでも仕方がないので、明日もう一度售票処へ行ってみることにして、時刻表をもう一度調べなおした。

午前に岳陽を発車する列車は二五七次（一〇…三〇発）と二五五次（一…〇九発）があった。早いほうがいいだろうと思って、一応二五七次の列車に決めた。明日は朝早く起きて、気合を入れて售票処へ行くこと。

腹が減ってきたので駅前ロータリーに出てみた。すでにあたりは夕闇に包まれていたけれども、ロータリーには人が行き交っていた。候車室前を通って、售票処の前へ。すでに售票処は閉じていたが、その前には食料品店や食堂が何軒か並んでいた。行ったり来たりして適当な食堂を物色していると、ある店の前でさとうきびか何かのジュースを売っていたので、それを飲んだ（コップ一杯、二角）。

武漢以来、急に夏がやつて来たような陽気で、日中はとても暑くて、夕暮れになつても暑さは去らないのだった。

少女が呼び込みをしていた小さな食堂に決めて、入っていく。メニューを見ながら、青椒肉絲と米飯と豆腐スープを注文する。

青椒肉絲は辛くはなくて日本的な（？）味でおいしかった。米飯は冷や飯を温めなおしたような感じだったけれども、まずくはなかった。腹一杯になつて、六・五元。

岳州版店に戻り、まだ列車のチケットを手に入れていないことや、人民幣がほとんど残っていない不安を抱えながら、共同シャワーで体を洗い、ヒゲを剃つて、ついでに洗濯もした。

岳陽楼ビールは、もちろん冷えてはいないのだったけれども、そもそもビールとはこういうものなのだと思います。飲めないものではなかった。

言葉がだんだん分からなくなってくるのだった。もちろん上海や沿海地方にいたときに分かっていたかという点、ほとんど聞き取れなかったのだけれども、ますますそれが分からなくなってくるようなのだ。分からないながらもいつのまにか親しんでいた上海地方の中国語だけれども、ここに来て、発音がかなり変わってきているのかもしれない。

※

次の日、早朝八時前に售票処へ行ってみると、すでに行列ができていた。おつくうがついていても仕方がないので、列の後尾に並んでいると、昨日の少年の仲間が声をかけてきた。

「昨日、出発したんじゃないかったのか？」

と不思議そうな顔をして聞くので、

「今日だ」

と苦笑いしながら答えた。

「切符を買ってやろうか？」

「ウオッーチーマイ（自分で買うよ）」

離れまぎわに、彼は

「サンヤオウー（三二五）」

という言葉を残した。

突然、三二五次と言われても、発車時間も目的地も分からないので混乱してしまつたが、初志を貫いて窓口の混乱に突入し、どうやら二五七次の列車のチケットを手に入れた。

二五七次は鄭州発、長沙行きで途中乗車なので、座席指定はない。

あとで時刻表を調べてみると、三二五次の列車は岳陽発、衡陽行き、八二一七発。彼に従つてそのチケットを買っていたら座れたのに、と悔やまれた。もつとも時間が迫っていたので、ちよつとあわてなければならなかつた。ただらうけれども。

列車が到着して、改札が開けられると、誰も彼もがプラットフォームへとなだれ込み、硬座車めがけて突進するのだ。

すでに改札口から近い硬座車の乗車口は先を争って乗り込もうとする人々でダンゴ状態になっている。それを確認すると、もつと離れた車両の方へプラットフォームを競争する。重たい荷物を抱えてしんどいけれども、ただひたすら走つていった。息を切らして、はあはあいいながらようやく車中へ。がんばったけれども、やっぱり座席を取ることはできなくて、

立ちんぼう。

途中駅に停車するたびに、乗り込んでくる人々と降りていく人々が入れ替わり、運の良い者から順に席を見つけて座っていく。ぼんやりと景色を眺めていたのでは、いつまでたっても座席を見つけることはできない。

二時間ほど立ちんぼうを続けて、ようやく座席を確保する。少しうとうとし、目覚めては眠り、列車は少し遅れて、長沙（チャンシヤ）に到着した。午後一時を少し過ぎていた。